

読書通信



No. 126

① 「昭和天皇実録」(全19巻、東京書籍)の刊行が始まり、4年かけて出版されていくという。宮内庁から全文が新聞社にはすでに配布されていてその全文を徹底的に検証してつくられた『昭和天皇実録』の謎を解く(文春新書、950円)は読み進むにつれ付箋だらけになった。半藤一利、保阪正康のご両人(全編)に戦前は磯田道史、戦後は御厨貴の両氏が加わっての鼎談、戦中は対談の形で話は進む。

満州事変から2・26事件、三国同盟、開戦、そして敗戦までの14年間のハイライトであるに

② サンフレッツチエやカーブにはがんばれよとつい声をかけたくなる。あれから70年、「75年間は草木も生えない」と言われた広島がよくぞここまでという思いと重なるからだ。青木健生(シナリオ)『まんがで語りつぐ広島復興』(小学館、1944円)は水道・電気・ガス・市電の復旧から銀行、小売、工業の復興など原爆で焦土と化した広島街と広島市民が立ち上がる姿を多面的に描いている。原爆投下の2日後には電気が供給された話、3日後には市電を女学生が運転して走らせた話など、いい話がたくさん出てくる。マンガは手塚プロダクション。

③ 暑いので薄くて軽いエッセー集に手が伸びた。藤原正彦『卑怯を映す鏡』(新潮文庫、497円)は日本や世界に対する皮肉風冗句の時評

せよ、幼年期・青年期から戦後の人間天皇まで一貫したストーリー性のもとで縦横に語られていく。さすがこの顔ぶれならではの視点や指摘、分析や疑問点はどれも刺激的で飽きることがない。天皇が満州事変を号外で知ったとか、『天皇独白録』にある例の「松岡はヒトラーに買収でもされたのではないのか」発言が『実録』には出てこないとか、「大東亜戦争」という呼び方は開戦後の12月12日の閣議で初めて決まったとか、ビルマとフィリピンは独立させるが英領マレーや蘭領インドネシアは「大日本帝国」の領土とする方針が内々決まっていたとか。軍人や政治家、侍従たちの動きや心の内にも入り込んでいく深みのある内容に啓発されるどころ大で、昭和史を勉強しなおそうという気になった。

が次から次へと登場する。『週刊新潮』連載時点が3年前なので時期はずれな個所もあるが、藤原センセイがTPPや消費増税に反対だったとは寡聞にして本書で初めて知った。

④ 今年の直木賞はすごいとかで、選考委員の北方謙三氏によると「20年に1回の傑作」で「欠点のない青春小説だ」という。つられて東山彰良『流』(講談社、1728円)を買ってしまった。確かに腕の立つ作家で台湾の複雑な社会状況が巧みに描かれている。祖父、両親、叔父叔母はじめ登場人物はみな極めて個性的だし、祖父殺し犯人探しの終幕も出色の出来だ。とはいえ主人公とその周辺はケンカに明け暮れ警察沙汰になるチンピラだらけ。「血の色と臭い」がいい人もいれば、もういいと言う人もいるだろう。(純)